

# 伝わるまで、 伝えたい

2000年から4年間、私はエベレストの清掃登山を実施した。ヨーロッパの登山隊から「日本は経済は一流だが、マナーは三流だ」と、日本隊の捨てたごみが散乱していることを指摘されたからだ。ベースキャンプ付近には、生ごみ、プラスチック、缶などが目につき、標高が高くなるにつれ、テント、ロープ、酸素ボンベといった登山道具のごみが増える。命の危険にさらされる山頂付近では、少しでも負担を軽くしたいがために荷物を置いてきてしまう登

山家の気持ちは、酸素ボンベを置き捨てたことがある私にも理解できた。その罪滅ぼしも兼ねて回収したごみは、ネパールの首都カトマンズに運んだが、街にはごみの最終処分場がなかった。日本に持ち帰ろうにもごみの輸出入は禁じられている。苦肉の策として私は、ごみを「展示物」として日本に持ち込むことにした。それなら許されたからだ。実際に私は都庁や銀座ソニービルでエベレストのごみの展示会を開催した。その後カトマンズには、福岡方式

と呼ばれる準好気性埋立て方式\*を取り入れた最終処分場がJICAの協力のもとで設けられた。ただ、設置は簡単ではなかったようだ。JICAが取り組む以前、1980年代にドイツがコンポストを利用した処分場をつくろうとしたが、臭いの問題などで地域住民に反対され、頓挫した経緯があったのだ。その轍は踏まないようにと、JICAはまずカトマンズの地域住民や子どもたちに環境教育を行った。廃棄物を放置すると土壌汚染や健康被害を招く

から処分場が必要だと丁寧に伝える活動が実を結び、ついに地域住民から処分場建設の理解が得られたのだ。そのおかげで、エベレストのごみもネパール国内で処分できるようになった。2010年にはケニアの首都ナイロビの処分場も視察した。きちんとした処分場ではなく、住民が勝手に捨てているただのごみ捨て場だ。JICAは、ごみ捨て場の横からナイロビ市内に流れ込む川に廃液が混入し、健康被害を招くおそれがある

ケニアのナイロビにある広大なゴミ捨て場。ナイロビのほぼ半分のごみ都在这里に捨てられる。近くには大きなスラムがあり、女性や子どもたちがガラス、アルミ、鉄など換金できるごみを拾い集める

から正式な最終処分場を設けるよう提案していたが、市はごみの処分場よりも病院や空港といった「派手な施設」を望んだ。そんなやり取りを聞き、外交官としてODAの仕事に従事していた父の言葉を思い出した。「相手国が望むものを提供する

だけ協力ではない」と。日本の協力の意味は派手な施設をドントつくることではなく、教育や農業や環境保全、廃棄物処理など、時間はかかるが後々必ず役に立つものを提供することにあるのではないか。

だ。タンザニアで40年以上も米栽培の技術普及を続け、キリマンジャロ農業開発センターも建設したのに、地元の人に十分認知されておらず、私は煮え切らない思いをした。国際協力は外交カードにもなる。日本の協力を「伝える」こともJICAの大切な役割だろう。

エベレスト清掃登山の後、私は富士山清掃活動もスタートさせた。今でこそ認知され、多い年で7000人近くのボランティアに参加していただいているが、当初はごみが捨てられている四つの自治体から理解を得られず、集めたごみの処分を断られるケースも少なくなかった。そこで私は、少々乱暴な方法で自治体へ富士山清掃に巻き込むことにした。活動拠点としていた山梨県の「もり

の学校」に4市町村の首長を招いて記者会見を開いたのだが、各首長には事前に詳しい内容は伝えなかった。メディアも集まった会見の開始10分前によく、「市町村にまたがった青木ヶ原樹海に大量のごみがある。回収したごみの処分も含め、市町村と富士山清掃を行うNPO『富士山クラブ』が連携するための記者会見です」と各首長に伝えたのだ。控え室で「聞いてない！」と怒り出す首長もいたが、もう遅い。怒っていた首長も会見が始まると観念したのか、「これからは一丸となって」と述べてくださった。会見は無事終了した。その後、環境省や山梨県のほか、富士急行などの企業やメディアも巻き込んだことで富士山清掃の意義は多くの人に伝わり、スタートして18年を経た今、山梨県側の大型ごみはまもなく「ゼロ宣言」が出せるほどまでに回収できた。

「伝える」と「伝わる」は違う。1度や2度呼びかけただけで伝えたいことは伝わらない。協力活動の意義も、伝えて、伝えて、何度も伝えて、ようやく相手に伝わるもの。富士山清掃と途上国のごみ最終処分場の建設、その大切さを伝えるときの苦労と伝わったときの喜びは似ているはずだ。伝わるまで、伝えたい。



富士山の青木ヶ原樹海で行われている清掃活動。ここでは約1,800本のタイヤが掘り出された。ほかにも、注射器や点滴などの医療廃棄物や家電、バイクなどが不法投棄されている

写真提供：野口健事務所



PROFILE  
のぐちけん  
アルピニスト。NPO法人「ピーク・エイド」代表理事。1973年、アメリカ・ボストン生まれ。亜細亜大学国際関係学部卒業。冒険家・植村直己の著書『青春を山に賭けて』に感銘を受けて登山を始め、25歳のときに7大陸最高峰世界最年少登頂記録を樹立。その後、エベレスト清掃登山、富士山清掃活動を実施する



清掃登山は標高6,000m以上の高地で行われる



野口さんからエベレスト清掃登山を引き継いだシェルバ(右)。カースト制度が残るネパールでは、ごみ拾いはローカースト(最下層)の仕事と見なされるが、そのようななかで清掃活動の意義を伝える